



憑依のリアリティ

三尾 稔 (みお みのる)

本館研究戦略センター

憑依タラシの社で

「わたしの来歴を知りたいと言ったのか！お前は遠く外国から来た者だ。知りたいたいと言ったなら教えよう！しかと聞け！」

あぐらをかき、抜き身の剣をもった腕を震わせて、数百年前の戦死者の霊が憑依した女性霊媒師が目を剥き、わたしに向かつて咆哮する。昨秋、調査で訪れたインド・ラージヤスターン州の古都ウダイブルの旧市街にある小さな居宅を改修した神霊の社でのことである。

神や死霊を霊媒に憑依させ、さまざまに願うことをかなえるという信仰は、こ

からかなり離れたところに実在し、農地のなかに埋もれるように記念碑が残っている。しかし、霊媒も周囲の人びともそのことは憑依が起こるまで知らなかった。六〇〇年もむかしの、遠く離れたところの領主の事跡が明かされたことは、願いをかなえる効力と相まって霊の憑依の真実性の証になっている。参拝者たちも霊媒を領主であるかのようにあつかうことで、その真実味をいっそう増すように振る舞っている。

霊と霊媒、それに参拝者が気持ちをおかせ合って憑依のリアリティがつけられる。このパターンは、調査している他の武人の霊の社にも共通する。社に持ち込まれる悩みや願いごとは、さまざまな病気から始まって不妊、夫婦や親子の不和、試験合格、事業の成功など人びとの日常に根ざしている。霊の前でそれらが語られることで個人の苦悩や欲望はその場にいる者全てに共有される。熱心な参拝者は憑依のたびに社に集まり、互いに顔見知りになって、憑依の前後に世間話をするようになり、日常的にもつきあうようになってゆく。社は霊と霊媒と人とならぬ絆を築く場なのである。社は、経済発展が急速に進むインドの都市で失われつつある近隣関係を補う存在なのだろ。

不思議なのは、ラージヤスターンでは信仰に基づき絆をつくるきつかけとなる

六〇〇年の孤独

冒頭のことばは、治病や願うことへの成就に効くことで急速に人気の出ているラージブートの武人の霊が発したものだ。とある学校に、誰が祭られているのかわからない、いわくありげな祭壇があり、代々の用務員が朝夕灯明をお供えしている。すると二年前突然、用務員をしている部族民の中年女性に社の霊が憑依し、自らを六〇〇年前に戦死したラージブートであると明かし、祭祀を求めた。女性宅に霊を勧請して祭祀を始めると憑依が定期的に起こるようになり、人びとの願いに応えるようになったという。今は憑依のある日の夕方には敷地の外にまであふれるほど多数の参拝者が訪れるようになっている。

夕方信者が集まると、武人霊やその他の神々を讃える歌を皆が唄い、祭壇に線香や灯明が供えられる。そのあいだ霊媒となる女性は武人の絵を凝視する。と、憑依が起こり女性は激しく体を震わせ、祭壇に供えてあった剣を取って振り回す。半ば失神状態の彼女を祭壇の前に座らせると振る舞いががらりと変わり、自分の高い男性が使うことばを居丈高に話した。この社では憑依中の写真撮影が厳禁されているが、その威厳は真の領主と見まがうばかり。顔色は生気にあふれ、光り輝いている。霊は彼女を介して信者と深

夜まで対話する。普段、ともすれば差別の眼差しを向けられる階層の女性を、人びとはあたかもかつての領主のようにあつかい、最大限の敬意を込めて額すき、自分の悩みや願いを包み隠さず話し、それに対する答えをありがたく聞くのである。

なぜこの霊は六〇〇年間の沈黙を破り、部族民の女性を介して再びこの世にあらわれる気になったのだろう。そんな素朴な疑問がわき、霊との対話が始めると真っ先にストレートに質問をぶつけてみた。それに対して冒頭のことばが返ってきたというわけである。

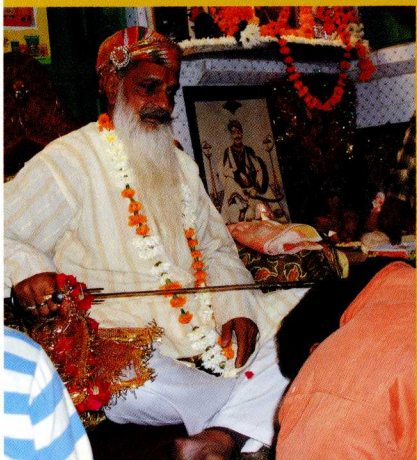
人びとは話の切れ目ごとに「カンマーガニー」(閻下万歳、という意味の古語)とつぶやき、かしまって霊の物語を聞く。霊は自らが戦死した合戦の模様をつぶさに語り、敵の剣で切られて飛んだ頭が落ちた地点が元の祭壇になったこと、その近くにトイレが造られ聖なる場所が汚されて不満をもったこと、霊媒は元の祭壇でも潔斎をしてから仕えるなど誠意が見られたので、彼女に取り憑きふさわしい祭祀を求めたことなどを述べた。この話から霊の側には人びとの信心がうずれることに危機感を抱いて出現したという動機がうかがえる。

復活する武人の霊

このラージブートの領地はウダイブルの社との対話のなかで何が伝えられているのだろう。インドの都市の喧噪のただなかにある社を訪れては自問する日々を続けている。



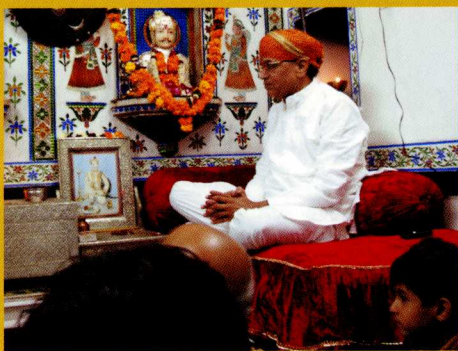
600年の時を経て復活した武人の霊の祭壇。憑依中の写真撮影は厳禁。憑依霊は実際には兄弟2体で、ともに同じ合戦で戦死したとされる(ウダイブル・コタリガリ 2008年11月撮影)



憑依中の撮影が認められた社。ジャイナ教徒の商人の老人に憑依がある。憑依中はラージブートの王子のような姿をし、剣を使って参拝者を清める(ウダイブル・ジョークホル 2008年11月撮影)



オフィスやホテルが建ち並ぶ通りに最近建てられた武人の霊の社。日常的な憑依はないが年に一度盛大な祭礼が催されるようになっている(ウダイブル・ウダヤホルマルグ 2008年11月撮影)



スタール(大工職人)が霊媒となる武人の霊の社。ここでも霊媒は王子の姿をしている。ラージブートの戦死者のみが武人霊となりうるが、霊媒にはさまざまなカーストの者がある。また霊媒になるのは必ずしも男性とは限らない(ウダイブル・ピチヨリ 2008年11月撮影)